定点観測写真資料の構造分析とその利活用に向けて
―デジタルアーカイブ・コンテンツとして―

秋山淳子

はじめに

現在、札幌市文化資料室では、約七万点の写真資料を所蔵し、閲覧および複製・掲載利用に供している。とくに近年では、写真資料の利用範囲は、一般市民や報道・出版関係をはじめ、市内部の行政利用にも広がりをみせている(1)。こうした写真資料への注目の高さは、他の資料群に対する利用にも拡大しており、全体として文化資料室の利用実績の伸張にも、大きく貢献している状況である(2)。

文化資料室所蔵の写真資料は、『新札幌市史』・『さっぽろ文庫』等の編纂事業のため、当室で収集した写真群と、平成二十二（二〇一〇）年に閉館した、札幌市写真ライブラリーから移管された写真群とに分けられる。これらは、前者が戦前期を中心とした内容であるのに対し、後者が戦後を中心としており、相互補完的に資料群を形成している。

こうした写真資料は、撮影当時の札幌市の様相について詳細に記録し、かつ異なる時点の比較によっては、経年変化を具体的・実感的に理解できる資料群といえよう。そのため、次年度以降の札幌市公文書館（仮称）の活動においても、公文書と併せて活用することで、札幌市の行政・社会変化の理解に有効な資料群と位置づけることができる。

そこで資料群の特徴を活かしつつ、写真資料の利活用をより積極的かつ効果的に促進するため、レファレンス・ツールの開発・整備や、資料（情報）提示方法の研究を進めていきたい。これらの課題を整理することは、公文書館の開館準備の一環として大いに有効である。こうした目的のもと、本稿では、写真ライブラリー移管資料のうち、比較的利用頻度の高い「定点観測写真」を対象に、これらの課題に取り組むこととする。

以下、一で資料群の概要を整理し、二で資料構造分析を行って特徴を把握する。つづく三では、この成果を踏まえ、特徴を活かした利用普及活動への具体的な活用方法論を、デジタルアーカイブ・コンテンツとしての利用を視野に入れて、検討したい。

一　定点観測写真の概要

（一）定点観測事業について

定点観測事業は、市民局生活文化部市民文化課(3)によって、昭和五十二（一九七七）年度を起点に、平成二（一九九〇）年度・平成十二（二〇〇〇）年度・平成二十一（二〇〇九）年度の計四回にわたって、対象地点・事象を継承しつつ、市内の各所を写真撮影したものである（以下、経年数がわかりやすいよう、各回を西暦で統一して表記する）。

その目的については、次のような記述がある。「札幌の歴史や生活・街並みなど、市政の活動状況を写真撮影（一〇年サイクルで同地点）し、次代へ引継ぐ貴重な歴史資料として、これを永久保存する」（九〇年）(4)、「札幌市の公共施設、街並み、物事、風俗などから幅広い対象を選び、その変化を写真で残すことによって市民にわかりやすく伝え、自分達の住む町への関心を引き出すとともに、街づくりを考える上での基礎資料とすること」（〇九年）(5)などである。この結果、ほぼ十年ごとに札幌市の様相について、多角的かつ地点継承的に捉えた写真記録群が形成された。

なお、この事業の推進主体の一つとして、札幌市写真ライブラリー（平成五～二十一年・一九九三～二〇〇九年）の存在は大きい。同施設は、札幌市の歴史、風俗等を記録した写真の収集、整理、保存をし、これを市民の「貴重な財産として後世に継承」するとともに、広く公開し「市民文化の向上に資する」ことを目的として設置され、これらの閲覧・情報提供、展示、ギャラリー運営などを行っていた機関である（閉館後、歴史写真の保存・提供等の機能は文化資料室へ移された）(6)。二〇〇〇年以降の定点観測では、撮影写真を写真ライブラリーの収蔵資料の中核に位置づけ、事業全体の目的を、同施設の目的と合致させることが目指されていた。そのため、同施設の監修のもと、後述する撮影対象の大幅な見直しと拡張が行われたと想定される。

（二）定点撮影方法の総体的特徴

次に、四回にわたる定点撮影について、写真概要から総体的特徴を検討する。撮影写真にメタデータとして付与されていた情報を基礎に、地域別・分類別に整理したものが表1および表2である。

各回の写真件数（枚数）は、約二千～三千六百件程度で、多少の増減はありつつも、基本的に拡大をしている。

まず地域別特徴（表1）としては、全回を通じ、中央区が約三〇％を占め圧倒的である。これに一〇％程度の東区・南区・北区が続き、西・豊平・厚別・白石・手稲各区が六～九％、清田区は三％以下にとどまっている。こうした地域格差については、表1のグレートーンで示した、七七年を基準とした増加率をみると、格差縮小への努力が払

表1　地域別件数

（単位：件）

地域	1977年	（%）	1990年	（%）	2000年	（%）	2009年	（%）	総数	（%）
中央区	754	38.7	694	28.2	1,141	31.5	962	29.5	3,551	31.5
		100		*92*		*151*		*128*		
東区	203	10.4	271	11.0	384	10.6	343	10.5	1,201	10.6
		100		*133*		*189*		*169*		
南区	236	12.1	227	9.2	343	9.5	318	9.8	1,124	10.0
		100		*96*		*145*		*135*		
北区	134	6.9	237	9.6	380	10.5	345	10.6	1,096	9.7
		100		*177*		*284*		*257*		
西区	141	7.2	231	9.4	284	7.8	259	7.9	915	8.1
		100		*164*		*201*		*184*		
豊平区	126	6.5	193	7.8	300	8.3	269	8.3	888	7.9
		100		*153*		*238*		*213*		
厚別区	84	4.3	221	9.0	244	6.7	230	7.1	779	6.9
		100		*263*		*290*		*274*		
白石区	108	5.5	171	6.9	223	6.2	223	6.8	725	6.4
		100		*158*		*206*		*206*		
手稲区	72	3.7	156	6.3	234	6.5	210	6.4	672	6.0
		100		*217*		*325*		*292*		
清田区	15	0.8	39	1.6	83	2.3	97	3.0	234	2.1
		100		*260*		*553*		*647*		
市外	2	0.1	2	0.1	2	0.1	2	0.1	8	0.1
		100		*100*		*100*		*100*		
テーマ	73	3.7	19	0.8	—	—	—	—	92	0.8
		100		*26*		—		—		
合計	1,948	100	2,461	100	3,618	100	3,258	100	11,285	
		100		*126*		*186*		*167*		

注）斜体で示した数値は、1977年の各区の件数を100とした場合の、各回の件数を示した指数。
各区の分区年度は、厚別・手稲区が平成元（1989）年、清田区が平成9（1997）年。

表2　分類別件数

（単位：件）

分類	1977年	（%）	1990年	（%）	2000年	（%）	2009年	（%）	総数	（%）
街並み	575	29.5	1,204	48.9	1,734	47.9	1,533	47.1	5,046	44.7
教育・文化	310	15.9	385	15.6	554	15.3	528	16.2	1,777	15.7
自然	107	5.5	142	5.8	498	13.8	477	14.6	1,224	10.8
交通・通信	241	12.4	190	7.7	230	6.4	197	6.0	858	7.6
生活・くらし	218	11.2	114	4.6	144	4.0	137	4.2	613	5.4
産業・経済	179	9.2	113	4.6	156	4.3	132	4.1	580	5.1
環境・衛生・福祉	143	7.3	146	5.9	106	2.9	92	2.8	487	4.3
治安・防災	74	3.8	91	3.7	85	2.3	66	2.0	316	2.8
行政	53	2.7	37	1.5	61	1.7	50	1.5	201	1.8
土木・上下水道	42	2.2	39	1.6	49	1.4	45	1.4	175	1.6
司法	6	0.3	0	0.0	1	0.0	1	0.0	8	0.1
合　計	1,948	100	2,461	100	3,618	100	3,258	100	11,285	100

注）付与された分類体系（階層的構造をもつ）は、撮影各回で異なるため、通時的な分類項目にまとめることが難しい。
そのため現状では、およそ全体で共通する第一分類項目を抽出し、それを適用・整理した仮分類の状態である。

われていることがうかがえよう。とくに厚別・手稲と清田の各区は、平成元（一九八九）年と九（九七）年に分区、成立している。そのため当初件数は少なく、分区後に地域アイデンティティの確立とも相まって、重点的に撮影地点数の増加が行われたと想定される。また、当該期は都市化の進展に伴い、札幌市内で近郊開発が積極的に進められた時期である。こうした地区が、適宜、撮影対象に取り込まれていったことも、地域格差の縮小の一因である。

また内容的な特徴（表2）では、「街並み」に分類されるものが圧倒的ではあるが、それ以外の項目も多岐に富むものである。具体的には、市内の各種公共施設、交通・土木など都市インフラ機能に関するもの、並木や公園などの自然景観などが含まれている。またこれらに加え、当時の札幌の人々のくらしぶりや、生活環境（環境問題まで含む）に関する項目も採り入れられている。これらには、撮影年における札幌の姿を、多角的に記録しようとする工夫がみられる。

二　定点観測写真資料の構造分析

次に、こうした概要をもつ定点写真資料の構造分析を行い、各回の撮影内容および地域分布について、具体的に明らかにしたい。

（一）分析の方法

最も重視した点は、定点撮影としての継承性の検証である。そこで、各撮影写真に付与されたタイトル・所在地情報を比較し、四回の撮影写真すべてに対して、相互の継承関係の有無を確認し、継承系統を分析した(7)。その際、三で述べるような、資料（情報）の提示方法と併せて検討することを目的としていたため、継承系統の基軸を所在地情報に設定した。

具体的には以下の通りである。まず、二〇〇〇年（登録番号がAHのグループ）のメタデータには、備考欄に、七七年（Eのグループ）と九〇年（Fのグループ）の撮影写真をはじめ、継承関係にある写真の登録番号の情報が記述されていた。さらに、〇九年の登録番号（BHのグループ）は、二〇〇〇年を継承している場合は、同一番号を付与していた。そこで、これらの情報をもとに継承関係データを作成し、タイトルおよび所在地情報の吟味を行って、系統にまとめ、それを所在地ごとに整理した。

表3は、そうしたデータの一部を抜粋して例示したものである（中央区・文化資料室付近）。市内の地区区分を番号で設定し、所在地情報をもとに継承系統を配列して、それに該当する写真番号を示した。この際、同一の住所にあたるものでも、タイトル（テーマ）が異なる場合は、ひとまず

表3　継承関係　系統一覧データ(一部抜粋:中央区　文化資料室付近)

地区		所在地	タイトル	定点以外	1977年	1990年	2000年	2009年	備考
7	15	南6条西4丁目	西北の間から見通し薄野裏の景観	歴史的写真			AH03587	BH03587	
7	16	南7条西1丁目	ゴミステーション(1)		E-00397				
7	17	南7条西3丁目	節分		E-01816		AH03128		真言宗新栄寺
7	17	南7条西3丁目	ジャスマックプラザホテル			F-02177	AH02805	BH02805	
7	17	南7条西3丁目	成田山新栄寺		E-01896	F-02385			
7	18	南7条西4丁目	ディスコクラブ			F-02213	AH02995	BH02995	
7	18	南7条西4丁目	豊川稲荷		E-01878	F-02356			
7	18	南7条西4丁目	薄野娼妓水子哀悼碑		E-00768	F-01011			豊川稲荷境内
7	18	南7条西4丁目	丸山定山句碑		E-00776	F-01017			豊川稲荷境内
7	19	南8条西2丁目	札幌星園高等学校		E-00531	F-00683	AH00953	BH00953	
7	19	南8条西2丁目	豊水まちづくりセンター・豊水会館					BH04354	BH新規
7	19	南8条西2丁目	豊水小学校大典記念文庫				AH01221	BH01221	新規
7	19	南8条西2丁目	鴨々川の柳	A-00964			AH03331	BH03331	
7	20	南8条西3丁目	マッサージ(跡地)		E-01712	*F-02438*	AH03046	BH03046	Fはテーマ共通(別所在地)
7	21	南8条西4丁目	除雪風景		E-00373		AH00785		
7	22	南9条西1丁目	豊水連絡所(跡地)		E-00027	F-00022	AH00026	BH00026	

別系統とした。また、写真番号については、二〇〇〇年の備考情報によるものをグレートーンで示した。とくに、七七年・九〇年の定点観測写真以外にも、底本写真（比較の起点となる写真）としているものがあるため、「定点以外」として、それらも併記している。

（二）撮影回ごとの特徴

分析の結果、四回実施された定点観測撮影では、それぞれ撮影対象・方法に次のような特徴があることが判明した。

①一九七七年

最初の撮影年にあたるが、おそらく撮影当初は、継続的観測の起点とすることを目的とはせず、当該年の札幌のすがたを、多角的に記録する単独事業であったと考えられる。

例えば、街並みの比率が相対的に低いのに対し、郷土文化・郷土史に関するもの（宗教施設、石像・石碑など）や、雪まつりをはじめとした各種行事、北国らしい生活風景(除雪やスノーダクトなど)、福祉や環境問題をテーマとしたものまで、市民社会生活の様々な光景が対象となっている。

また、当時の市政と、市民生活の関係を記録する意図が込められている点も特徴である。市内の公共機関内や各種行政サービスの様子（職員の執務風景も含む)、「市長を囲む移動相談室」などの行政イベント、さらには市予算についての新聞報道記事までを画像化している(8)。

②一九九〇年

この回については、撮影地点設定の方針説明、撮影仕様書などが残されている(9)。この資料には、「札幌の歴史や生活・街づくりなど市政の移り変わりを記録し、これらを歴史資料として永久保存する」という目的のもとに、「一〇年サイクルで同地点」で撮影するという記述がある。さらに撮影実施に際して、七七年の撮影データを基礎に「第二回目」の撮影を行うとして、継承関係を明記している。すなわち、この時点で、七七年の調査を底本に、定点観測事業が形成されたと考えられるだろう。

また、撮影地点設定に際しては、各区役所へ、前回撮影地点のチェック（不要個所の削除、不明個所の明記）と、必要新規地点の設定につき、協力依頼をしている(10)。予定総件数二、五〇〇地点のうち、前回継承数が約一、六〇〇地点、新規は約九〇〇地点であった（実際の撮影件数を分析すると、地点継承率は約五十八～五十九％と想定される）。

こうして撮影が実施されたため、基本的な撮影対象・内容の傾向は、前回と同様である。新規分については、新・増設された公共施設等が中心であるが、企業・商店街など、市内の経済活動に関する事項の増加がみられる。また非継続となったのは、各種施設の内部や執務風景（外観撮影のみを継承）、行政イベントなどの項目が中心である。

③二〇〇〇年

この回からは、前述のように札幌市写真ライブラリーが設置されたことにより、事業の進め方に大きな変化が起きたと推測される。写真ライブラリーは、市内部（各部課）からの移管写真を所蔵しており、前二回分の定点観測写真もこれに含まれていた（他に、広報課＝登録番号がAのグループ、中央区＝Bのグループなどがある）。そのなかで、定点写真は資料群として規模も大きく、定点観測事業の目的と、ライブラリー設置目的の共通性から、所蔵資料の中核に位置づけられたと考えられる。

これをうけ、二〇〇〇年の事業では、このライブラリー資料としての特徴を強化するため、撮影対象の見直しが行われた(11)。事業目的には「札幌市の公共施設、街並み、物事、風俗などから幅広い対象」を選び、その「変化」を写真記録化して、「市民にわかりやすく伝え、自分達の住む町への関心を引き出すとともに、街づくりを考える上での基礎資料とする」ことが示された。前回までの位置づけに比べ、市民への公開と街づくりの基礎資料化という点で、市政上の利用価値をより積極的かつ明確にしている。

そこで撮影箇所の決定に際して所蔵写真を再調査し、七七年・九〇年地点について、継続撮影の適否確認を行った。ここで採用されなかった地点は、すでに継続撮影対象が消

滅したものなども多いが、変化の乏しい対象（石碑など）も多く除外されたと推測される。

また、新規地点の導入も積極的に行われた。基準は次の四項目である。①ライブラリーの所蔵写真や開拓時代からの歴史写真の撮影地点、②新たな公共施設や再開発等により、今後の変化が見込まれる地点、③福祉・環境分野、④時代、風俗を示す項目である。①は、定点撮影写真を、ライブラリー資料の中核に位置づける意味での特徴強化であり、②は対象地域の拡大につながっている。③では保育施設や、公園・緑地整備に関する地点が追加されている。また④では、コンビニエンスストアや百円ショップ、若者文化の様子など、七七年とは異なった、当該年代の世相を象徴する事象を多く採り入れている。

この結果、前回からの地点継承率は約五十七パーセントとなったが、七七年の撮影地点で九〇年に継承されていなかったものを復活させた場合もあり、それを加味すると、以前の地点との継承関係をもつものは約六十五パーセントであった。

④二〇〇九年

二〇〇〇年の登録番号との統一を図るなど、基本的には前回を継承する部分が多い。また、仕様書[12]には、撮影条件にアングルについての注意があり、基本は「被写体の特徴が最もよく現れるアングルを選択」するが、過去の撮影写真がある場合は「そのアングル等も考慮すること」としている。それを受けて、とくに二〇〇〇年撮影写真と連携性がよく保たれた画像となっている場合が多い。

前回同様、前述の基準に基づき、継続撮影の適否判断と新規導入が行われてはいるが、前回からの地点継承率は約八十九パーセントとなり、格段に高いのが特徴である。新規には、新設の公共施設等のほか、世相を反映させるものとして、新設商業施設やミュンヘンクリスマス市、日本ハムファイターズの優勝パレードなどが含まれている。不採用となった地点は、撮影対象であった施設移転後の跡地など、継続撮影の必要性の低いものが中心である。

小括

定点撮影事業に関しては、公文書等の記録が断片的であるため、開始当初の目的など詳細は不明である。しかし、その成果品である写真資料の構造分析を通じて、およそ次のように推定された。

初回撮影（七七年）は、札幌オリンピックと政令指定都市移行から五年後で、都市化が著しく進展し、各地で様相の変化が顕著な時期であった。そこで当該年の札幌を多角的に記録することに主眼が置かれ、多様なテーマ設定により撮影が行われた。九〇年に至り、この資料群を基本として、地点を継承して撮影する「定点観測」の視点が盛り込

まれる。そして九三年には、札幌市写真ライブラリーが開館したことで、市政における写真資料の収集・活用の意義が深化した。これに伴い、定点観測事業も方針見直しを行いつつ規模を拡大し、二〇〇〇年・〇九年の二回にわたって撮影が実施された。

こうした経過を経て、定点観測写真撮影は継続事業化され、ほぼ十年ごとに各時点での札幌の多様な姿を撮影し、その変遷を記録する資料群が形成されたと考えられるのである。

（三）撮影地点分布の特徴

①地域区分の設定

次に、撮影地点の分布状況について検討する。今回は、継承系統について所在地情報を軸に整理をしたが、そのデータを用いて、各区内での分布傾向を明らかにしたい。

表4は、作成した定点撮影における継承系統の分布状況を、各区別に示したものである。これとあわせ、各地区において、一系統につき平均何件の撮影資料が属しているか（何回継承して撮影されたか）を算出したのが、グレートーンの平均件数値（＊）である。この値には、E・F・AH・BHの登録番号をもつ写真資料と、二〇〇〇年に新規に組み込まれた歴史的写真等が該当し、その系統別の撮影回数（件数）は最大値で四回となる。すなわち、この値が高い地域ほど、一地点・テーマに対して、継続して撮影が行われていることを示している。

この表からは、継承系統数についても、写真件数と同様の地域格差が生じているが、継続撮影回数の平均値でみると、清田区以外の区ではすべて二・五回程度で、大差はみられないということがわかる(13)。つまり、どの区域においても、平均二～三回程度の比較写真が存在しており、定点観測写真の継承系統が、各地域の経年変化を考える際のツールとして機能しうると考えられる。

そこで、各区別に継承系統の分布状況を詳しく検討し、地域の経年変化の特徴把握を試みた。なお、その際の区内地域区分の基準としては、まちづくりセンターの所管区域区分を基本に、適宜、下部区分等を設定、適用した(14)。さ

表4　地域別系統数

地域	系統数	(%)	平均件数＊
中央区	1,533	33.0	2.47
東区	466	10.0	2.68
北区	438	9.4	2.62
南区	402	8.7	2.77
豊平区	374	8.1	2.48
西区	372	8.0	2.54
厚別区	320	6.9	2.46
白石区	291	6.3	2.56
手稲区	262	5.6	2.62
清田区	127	2.7	1.93
山岳地域（注1	17	0.4	3.00
市内不明（注2	40	0.9	1.10
市外	3	0.1	3.00
計	4,645	100	2.48
写真件数総数	*11,601*		
内訳）定点観測写真	*11,285*		
歴史的写真	*64*		
広報ほか	*252*		

注1）藻岩山(南区)、手稲山(手稲区)以外の山岳地域。
注2）市内であるが、所在地情報が不明確なため、具体的な地域に区分できないもの。

表5 各区地域別系統数(1)

中央区

地区	系統数	撮影回数			地点数(写真件数)				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
本府	**215**	58	68	89	104	114	169	150	27
中央	**246**	43	64	139	145	109	172	125	31
大通	**82**	18	26	38	34	47	64	55	5
東北	**64**	12	17	35	32	20	55	43	9
苗穂	**28**	7	4	17	11	10	22	20	2
東	**43**	10	12	21	22	16	39	27	11
豊水	**133**	29	44	60	73	66	100	86	20
西創成	**61**	14	13	34	27	26	50	43	6
曙	**28**	7	8	13	17	13	23	17	4
山鼻	**115**	29	25	61	59	69	70	70	5
幌西	**54**	16	12	26	25	25	42	42	3
西	**72**	9	16	47	33	31	52	32	6
南円山	**44**	10	13	21	16	16	36	36	10
円山	**106**	23	29	54	47	47	85	68	12
桑園	**133**	31	26	76	74	49	91	87	7
宮の森	**53**	14	8	31	25	26	43	32	3
大通公園	**54**	6	9	39	33	21	25	21	6
詳細不明	**2**	0	0	2	1	1	0	0	0
計	**1,533**	336	394	803	778	706	1,138	954	167
	(%)	*21.9*	*25.7*	*52.4*					

東区

地区	系統数	撮影回数			地点数(写真件数)				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
鉄東	**93**	20	33	40	45	52	76	65	6
北光	**59**	17	26	16	32	41	49	43	3
北栄	**30**	10	10	10	13	24	27	23	1
栄西	**15**	2	5	8	4	7	14	8	1
栄東	**23**	4	9	10	12	13	21	16	1
元町	**37**	11	9	17	15	21	33	28	1
伏古本町	**45**	12	14	19	16	27	40	34	3
丘珠	**64**	9	20	35	20	29	47	52	3
札苗	**66**	17	18	31	29	35	51	51	1
苗穂東	**34**	14	11	9	21	23	30	28	1
計	**466**	116	155	195	207	272	388	348	21
	(%)	*24.9*	*33.3*	*41.8*					

表5　各区地域別系統数(2)

南区

地区	系統数	撮影回数			地点数(写真件数)				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
真駒内	111	48	78	64	78	64	85	79	5
石山	31	10	14	16	14	16	22	26	3
簾舞	20	5	9	7	9	8	19	14	2
藤野	43	12	29	29	29	29	29	27	2
藻岩	27	11	13	16	13	16	26	24	2
藻岩下	22	8	12	12	12	12	21	20	0
澄川	26	6	14	11	14	11	19	21	1
芸術の森	42	8	10	24	10	24	39	36	1
定山渓	58	19	31	25	31	25	52	47	6
藻岩山	22	7	12	10	12	10	17	14	2
計	402	134	222	214	222	215	329	308	24
		33.3	*55.2*	*53.2*					

北区

地区	系統数	撮影回数			地点数(写真件数)				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
鉄西	81	17	29	35	28	35	69	63	16
幌北	30	14	8	8	19	18	30	25	4
北	47	9	9	29	16	20	40	37	1
新川	33	4	12	17	8	23	28	25	0
新琴似	47	10	12	25	20	28	36	35	1
新琴似西	12	2	5	5	2	9	12	8	0
屯田	32	5	12	15	11	20	21	25	0
麻生	21	2	7	12	5	8	18	16	2
太平百合が原	23	4	9	10	5	14	21	18	1
拓北・あいの里	63	10	28	25	13	37	58	52	4
篠路	49	10	15	24	15	26	46	41	2
計	438	87	146	205	142	238	379	345	31
	(%)	*19.9*	*33.3*	*46.8*					

西区

地区	系統数	撮影回数			地点数(写真件数)				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
八軒	33	3	11	19	12	18	25	20	1
琴似二十四軒	81	20	22	39	44	47	60	54	5
西町	75	17	19	39	33	38	61	55	1
発寒北	52	13	15	24	25	36	35	35	0
西野	44	10	15	19	14	33	32	34	2
山の手	30	8	10	12	9	19	26	23	3
発寒	26	2	13	11	3	16	20	20	3
八軒中央	30	2	13	15	8	19	25	19	0
計	371	75	118	178	148	226	284	260	15
	(%)	*20.2*	*31.8*	*48.0*					

表5　各区地域別系統数（3）

豊平区

地区	系統数	撮影回数			地点数（写真件数）				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
豊平	75	7	23	45	16	30	61	49	11
美園	26	8	6	12	12	14	21	20	3
月寒	60	18	14	28	30	39	48	38	4
平岸	16	2	7	7	3	6	12	15	3
中の島	22	2	10	10	5	11	18	16	2
西岡	41	7	15	19	13	27	35	26	0
福住	12	0	1	11	1	5	9	8	0
東月寒	53	10	19	24	13	24	47	49	4
南平岸	68	16	19	33	34	37	49	47	4
詳細不明	1	0	0	1	1	0	0	0	0
計	374	70	114	190	128	193	300	268	31
	(96)	18.7	30.5	50.8					

白石区

地区	系統数	撮影回数			地点数（写真件数）				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
白石	59	19	32	34	32	34	48	42	1
東白石	31	6	12	23	12	23	17	19	0
東札幌	47	5	13	21	13	21	26	37	0
菊水	52	5	26	34	26	34	43	33	5
北白石	25	5	9	18	9	18	22	22	0
菊の里	28	7	8	12	8	12	25	27	1
北東白石	14	3	5	9	5	9	12	12	0
白石東	35	6	9	21	9	21	30	31	0
計	291	56	114	172	114	172	223	223	7
		19.2	39.2	59.1					

手稲区

地区	系統数	撮影回数			地点数（写真件数）				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
手稲	36	10	9	17	17	22	31	22	1
手稲鉄北	35	8	15	12	10	25	31	28	0
前田	52	9	18	25	9	30	50	46	0
新発寒	19	3	7	9	4	11	17	18	0
富丘西宮の沢	38	10	9	19	12	23	33	31	0
稲穂金山	32	8	17	7	10	23	29	29	0
星置	42	5	11	26	7	21	33	33	0
手稲山	8	1	3	4	5	2	8	2	0
計	262	54	89	119	74	157	232	209	1
	(96)	20.6	34.0	45.4					

清田区

地区	系統数	撮影回数			地点数（写真件数）				
		4	3	1～2	77年	90年	00年	09年	その他
北野	13	3	2	8	3	7	9	11	0
清田	50	4	16	30	9	18	41	36	2
清田中央	19	0	3	16	1	4	7	16	0
平岡	14	0	2	12	0	4	7	12	0
里塚・美しが丘	30	3	2	25	5	6	19	23	0
計	126	10	25	91	18	39	83	98	2
	(96)	7.9	19.8	72.2					

らに今後は、地域変容の基礎データとして、地域人口情報とあわせて提示することも考えている[15]。

各区の地区別の系統数、地点数（写真件数）を示したのが、表5および表6（厚別区）である。地域変容と撮影地点の関連について、全区につき、それぞれ分析を行ったが、ここでは紙幅の関係上、厚別区を例に具体的にみていくこととしたい[16]。

②区内の撮影地点分布分析　―厚別区を例に―

厚別区は、初回撮影の七七年当初、白石区の一部であった。それが平成元（一九八九）年に分区され、厚別中央・厚別南・厚別西・もみじ台・青葉・厚別東の六地区からなる厚別区となる。系統数として最も多いのが、厚別中央地区である。この地域は、最も古い歴史をもつとともに、新札幌副都心を擁するエリアである。これに続くのが、隣接する厚別南地区（大谷地、上野幌）と、北海道開拓記念館・開拓の村、札幌テクノパークを擁する厚別東地区となっている。

地点数の増減をみると、七七年から九〇年にかけての増加が大きく、それ以降は比較的安定した推移である。これは、九〇年が分区・成立直後の撮影となり、区としての地域アイデンティティ確立を目的に取り込んだことが理由と考えられる[17]。それまで対象とされなかった地域の公共施設や、街並みなどが広く対象化され、撮影地点新設が行なわれた。そのため分布地域は、九〇年で大きく拡大している。

具体的には、次のような変化の要因が挙げられよう。

区内の都市開発は、新札幌駅を中心とした厚別副都心の形成と、ひばりが丘・青葉・もみじ台などの住宅団地開発の二つを大きな推進力として展開した。

厚別副都心には、昭和四十八（一九七三）年にJR新札幌駅が開業し、周辺部にサンピアザ（昭和五十二）をはじめとした商業施設や、青少年科学館（五十六年）、区体育館（同）などが相次いで建設された。さらに地下鉄東西線の延伸（五

表6　厚別区地域別系統数

地区	系統数	撮影回数				地点数（写真件数）				
		4	3	1〜2	平均＊	77年	90年	00年	09年	その他
厚別中央	**89**	11	36	42	2.39	22	62	70	56	1
						100	*282*	*318*	*255*	
厚別南	**72**	6	33	33	2.44	11	50	57	58	0
						100	*455*	*518*	*527*	
厚別西	**47**	5	18	24	2.34	6	27	36	41	0
						100	*450*	*600*	*683*	
もみじ台	**32**	6	20	6	2.94	7	26	30	30	1
						100	*371*	*429*	*429*	
青葉	**16**	3	7	6	2.56	7	10	11	10	2
						100	*143*	*157*	*143*	
厚別東	**63**	7	22	34	2.40	32	44	40	35	0
						100	*138*	*125*	*109*	
詳細不明	**1**	0	0	1	1.00	1	0	0	0	0
合計	**320**	38	136	146	2.51	86	219	244	230	4
	(%)	*11.9*	*42.5*	*45.6*		*100*	*255*	*284*	*267*	

注）斜体で示した数値は、1977年の件数を100とした場合の、各回の件数割合を示した指数。
　平均値のうち、合計平均値は、「詳細不明」項目を除いて計算した数値。

十七年）や、平成に入ってからの商業施設拡充まで、この地域の変容は引き続き定点観測に多く採りあげられ、都市化の様相が記録されていった。

しかし一方の住宅団地開発は、昭和三十～四十年代に進められ、すでに七七（昭和五十二）年の撮影時には、その多くが造成を完了していた。そのため、撮影対象となるような展開中の事業地域とは見なされず、あまり多く撮影地点が設定されなかった。ところが九〇年の撮影では、前述のように、区としてのアイデンティティを形成する目的が付与された。その結果、区の地域的特徴という意味で、市内郊外開発の視点からこの地域に撮影地点が新設され、団地内の学校や公園などが対象に組み込まれたと考えられる。

なお、工業団地開発では、札幌テクノパークの造成・分譲（昭和六〇～六三年・一九八五～八八年）に伴う、九〇年の地点新設が特徴的であり、その後の拡張事業も継続撮影された。

また、環境事業に関する点からも撮影が行われている。昭和四十九（七四）年に完成した厚別清掃工場（平成二年・二〇〇二年廃止）は、余熱利用のプール等の付属施設もあわせて、七七年から継続的に撮影対象とされた。また、山本処分場は、埋立て開始の昭和五十九（八四）年以降、継続的に撮影され、跡地利用についても総合公園「厚別山本公園」（仮称）に向けての整備事業が記録されている。これは現在も進展中の環状グリーンベルト構想（五十五年より整備着手）の一部でもあり、一連の緑地整備事業の一端を伝える写真となっている。

なお、同区には北海道開拓記念館（昭和四十六年・一九七一年開館）と、開拓の村（五十八年・八三年開村）の文化施設がある。定点観測撮影では、七七年に開拓記念館が内部の展示の様子をふくめて詳しく撮影されたのに対して、二〇〇〇年の撮影からは、開拓の村を中心に地点設定が変更されている。これは、七七年当時の記録としては、記念館内部の展示の状況も重要であったが、のちに設定された定点観測という視点での地域の特徴的景観としては、新設された開拓の村が選ばれ、撮影地点の重心が移ったものと考えられる。

三　定点写真資料の利活用にむけて　―方法論の検討―

（一）資料活用方法の検討の意義

現在すでに、来館利用者に対する写真資料提供において、定点観測写真の利用頻度は高く、今後も館の財産（情報資源）として活用することで、公文書館の社会的認知度の向上にも寄与することが期待できる資料群といえる。そこで、今回の分析成果をふまえ、その活用方法論を次の観点から

検討する。

一つは、市民への閲覧利用の普及をはかる広報的観点である。現状の利用者数を鑑みると、まだあまり文化資料室を利用したことがない、存在を知らないという市民も相当数存在していると想定される[18]。こうした市民に対しても、定点観測写真は地域的広がりもあり、また年代のなじみ易さなどから、所蔵資料全体のなかでもとくに親しみやすく、かつ興味深い対象といえよう。

そこで、この資料群を公文書館と市民を結ぶ糸口として位置づけたい。公文書館としては、利用者層の拡大と、これを契機に公文書をはじめ様々な所蔵資料へと、利用者の興味関心を引き出していくような経路を構築していくことが課題である。こうした意味から、潜在的利用者層へ働きかける、定点観測写真を用いた効果的な資料提示方法を研究したい。

もう一つは、自館の所蔵資料を深く理解し、公文書館の活動において資料を効果的に活用するための基礎研究と、提示・活用促進へむけた方法論研究の観点である。

とくに展示の企画・作成、レファレンス業務等では、提供するサービスの質を維持・向上させる上で、資料群理解を軸とした研究と、その共有が不可欠である。札幌市をふくめ、一般に公文書館等の所蔵資料は、それぞれに出所（出自）の異なる複数の資料群から形成されている。その各資料群の特徴について、コンテクスト（作成者情報や来歴など、資料の背景となる情報）を踏まえつつ、内容構造を把握することがアーカイブズ（資料収蔵機関）では重要である。これにより、多様なニーズをもつ利用者に対して、資料群の特徴を理解した上で、それらを臨機応変に組み合わせたサービス・情報提供が可能となるのである。その所蔵資料の構造および特徴理解、提示のケース・スタディとして、今回の研究を位置づけたい。

そこで、具体的方法としては、ウェブサイト上での提示と、公文書館の展示を軸とした二つの手法を検討する。とくに、今後普及が期待されている、デジタルアーカイブにおけるコンテンツとしての活用を視野に、資料（画像イメージ）へのアクセスを比較的容易にし、その魅力を広く発信できる資料（情報）提示の方法を考えたい。

（二）現在の状況

目録情報　タイトル・所在地・撮影年等の写真資料に関するメタデータは、写真ライブラリーが作成していたデータで、資料とあわせ移管をうけたものが主体である。文化資料室では、これを写真資料の検索用データベースに利用している。問題点としては、各回のデータ項目が不統一であることで、とくに分類については体系が共通化されていな

い[19]。そのため、現在は仮分類（大分類）が付与されており、同じ定点観測写真資料内でも分類の横断検索はこの階層のみとなっている。

また、文化資料室が収集した写真資料群とライブラリー移管資料群とでは、メタデータ項目が不統一であるため、両者の横断検索は、タイトル・備考情報のキーワード検索のみで対応している。今後はこの検討を行い、共通データ体系を構築・付与する必要がある。

利用条件　札幌市事業の成果品であるため、著作権はすべて市が所持している。そのため、文化資料室（市公文書館）が行う公開・閲覧提供等では、制限なく活用できる資料群である。

デジタル化　すべての資料について、画像イメージのデジタル化が完了しており、現在、文化資料室のデジタルアーカイブでも、資料検索・画像閲覧までが可能な状況である。ファイル形式はすべてＪＰＥＧ形式であるが、デジタル化の際の解像度にばらつきがあり、低画質のもの（一〇〇ｄｐｉ以下）が含まれている。

（三）展示への活用方法の検討

このように、すでにデジタルアーカイブでの公開も含め、広く市民へのアクセスを確保している状況ではある。しかし、所蔵資料利用の普及という観点からは、より積極的に定点観測写真の魅力を発信していく必要がある。

札幌市政や地域の移り変わりに関心をもつ人々は、市内外に多く存在していると考えられる。こうした人々は、公文書館の潜在的な利用者というべき存在であり、公文書館としては、そうした人々へ所蔵資料の魅力を発信し、利用への糸口となる装置を構築、提示することが課題である。その意味では、どこでも、だれでも、気軽に閲覧できるウェブサイト上のデジタルアーカイブは大変適合的であり、そこに効果的なコンテンツを配することが重要であろう。

そこで、定点写真資料を活用したデジタルアーカイブ・コンテンツの作成を視野に、まずは市公文書館・展示室の一コーナーを利用した、デジタルアーカイブ展示を一つの足がかりとして検討したい[20]。

なお、定点観測写真を使用した展示は、すでに前年度のカルチャーナイトに際して開催したパネル企画展の実績がある。この展示に対しては、前年までのカルチャーナイトを大幅に上回る来館者があり、多くの市民が高い関心をもっていることが示唆された。この成果は、定点観測写真がもつ市民への親しみやすさ、わかりやすさなどの特長を、改めて実感した経験となっている[21]。

①展示イメージ

現在、複数検討しているうちの一試案という位置づけで

はあるが、具体的イメージを提示してみたい。この画像検索のキーは所在地情報におき、これに撮影地点を軸とした継承系統情報をリンクさせ、選択指定した地点に対して画像を連続的に提示する、という方法である。

前提作業としては、検索用データとして、市全域～各区～地区（まちづくりセンター管轄地区。必要に応じて小区分を追加）の階層ごとにブロック区分した地図を準備し、それぞれに該当する地点ポイントを付与することが必要である。また、操作・情報提示用のハードウェアとしては、タッチパネル式の端末を利用する[22]。

閲覧操作手順は、以下のようなイメージである。

まず、キーワード検索[23]の入力用テキストボックスと、市全域～各区～地区の各階層について、ブロック区分や撮影ポイント情報を付与した地図を提示する（この地図は、撮影地点分布の粗密に応じて、地域ごとに適切な階層を設定する。最も詳細な例が、図1のイメージである）。利用者は、この地図上に示したポイント（もしくはブロック）をタッチ指定する。この場合のポイントは、ある地点からの俯瞰（矢印表示）や通り（線表示）のような形式も考えられる。また、この際に複数の継承系統データが該当する場合には、系統リスト一覧を表示した画面をはさみ、そこから一つ指定する操作を追加する。

これをうけて提示されるのが、個別の継承系統の画像提示イメージである（図2）。系統のタイトル、撮影地点情報とともに、該当地点付近の地図を表示し、ここに年代順に写真を遷移させながら提示する、という方法である。この際に写真に適宜キャプションを付与し、経年変化の理解を

図1　定点観測写真の提示イメージ
資料選択の方法

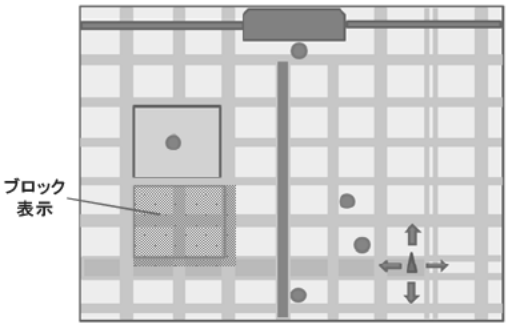


図2　定点観測写真の提示イメージ
画像表示の方法

助けることとする。具体的には、次の例で見ていきたい。（一連の写真は、本稿の末尾にまとめて提示しているので、あわせて参照していただきたい。）

札幌駅北口（写真1）　一九七七年には、まだ駅前には何もなく、センチュリーロイヤルホテルだけが高層建築として目立つ状態である。これが九〇年には、鉄道高架化工事が始まり、二〇〇〇年には新駅舎も建設され、北口広場として整備されている。そして、二〇〇九年にはJRタワーも開業して、商業施設全体も拡充した、という変化が見てとれる。

モエレ沼（写真2）　七七年にはさら地の状態であったものが、九〇年には植樹が開始されている。そして二〇〇〇年には、イサムノグチの設計による公園へと整備が行われて様相が一変した。そして、二〇〇九年にはその進展による新たな公園施設の姿が記録されている。

歴史的写真（写真3）　前述のように、二〇〇〇年の撮影では、新規地点として、明治期以来の歴史的写真を題材として、同地点の現在を記録する活動も行った。こうした写真群も、底本となった歴史的写真と比較することができれば、よりダイナミックな変化を看取できる素材となる。

例としたのは、『札幌全景』に掲載されている大正六（一九一七）年の時計台付近の俯瞰写真を底本とした写真群である。これをみると、時計台というシンボルを共有するため、その著しい都市化の様子をよく理解できる。

②画像提示の問題点と対応策

前述の画像展示方法には、次のような問題点がある。

例示した札幌駅北口・モエレ沼の二例とも、ほぼ同じ地点や敷地を撮影しているが、撮影角度や場所など、歴史的写真で提示したようなレベルでは一致していない。データ上で一連と位置づけられている写真群のなかには、こうした画像イメージという点で「ズレ」が生じているものが多い。はなはだしい事例としては、写真4の「新札幌（サンピアザ）周辺」と題されたシリーズなどが挙げられる。このように、データ上、所在地情報も同一の地点が付与されているが、実際の画像イメージでは閲覧者に対して連続性が乏しいと感じさせるものも含まれている[24]。

こうしたイメージ上の齟齬への対策は、画像とあわせて提示する地図情報の表現で工夫したい。ズレの程度に応じて、地図上の地点表示を、ポイントではなくブロックや線を用い、閲覧者が「一連」のものとして把握できるよう促す手法である。また、別のタイトルシリーズとされていても、ほぼ同地点で撮影されているものは、同じブロック等にリンク付けし、類似系統の一覧として閲覧者へ情報を提示する画面も導入する。この点は、資料アクセス（検索）

の側から考えれば、地図をブロックなど大きな範囲で分割し、曖昧検索・指定に対応しつつ、簡易な操作で閲覧できる工夫ともなっている。

③展示方法の特長と今後の展望

今回検討した展示方法の特長としては、タッチパネル式端末を用い、地図を介した比較的簡易な操作で、多彩なコンテンツデータへ導くという点があげられる。

駅や主要施設などの情報とあわせて地図上に表現した地点・地区は、一般市民だけでなく、外来者であっても理解しやすいアクセスポイント設定であろう。これとキーワード検索を併用することで、まずは来館者に対して、展示として資料画像イメージに容易に到達できる装置を用意する考えである。そこから所蔵資料への関心を引き出して、閲覧室利用へ導き、レファレンスによって、より幅広い資料の紹介、利用にまでつなげたい。定点観測写真のデジタル画像展示は、そうした利用普及の糸口と位置づけている。

また、将来的には、同コンテンツを公文書館外で閲覧できるように展開させていきたい。例えば、札幌市中央図書館や、丘珠空港に設置されている歴史展示スペース[25]など、類縁機関にサテライトを設置することなどを検討したい。

さらには、地理情報システム（GIS）[26]と連動させ、インターネット上の地理情報検索からも、自由に所蔵写真資料へアクセスし、閲覧できるデジタルアーカイブ・コンテンツとすることも視野に入れたい。これが実現すれば、札幌市公文書館を認知していない人物でも、インターネット上の地理情報検索を通じて、直接的に資料閲覧に導かれ、世界のどこからでも所蔵資料の利用者となることが可能である。そうした装置の構築・設定は、利用者層の裾野をひろげ、市公文書館への認知度を高め、所蔵資料の有効活用に大変効果的であると考えられる。

（四）ウェブサイト検索ツールとしての活用

このように、継承性を活かした資料活用方法として、まずは展示を足がかりとした方法論を検討した。しかし、第一段階の展示室内端末で設定できる目的は、主として来館者に対し所蔵資料への関心を引き出して、閲覧室利用へ導くこととなる。

これに比べ、前述のようにウェブサイトを活用する方法は、いつでも、どこからでもアクセスできるため、札幌市の街づくりや社会変化などに関心をもつ、潜在的な利用者層に対して、より広範に訴えかける効果が期待される。

そこで、まずは展示研究と並行して、整理した継承系統情報を、写真資料検索・閲覧の補助ツールとして、簡単な解説とリストからなるガイドに編集する。これを現在のウ

エブサイト検索画面へリンク設定し、公開・活用する方法も検討したい。

おわりに

今回の検討では、定点観測写真資料の総体に対し、継承系統分析を行い、撮影地点の変遷について事業の展開過程とあわせて把握をした。この成果をふまえ、具体的に資料提示や、検索ツールへの活用について検討を行った。

これらを公文書館利用の普及活動と、資料（情報）提供・レファレンスを中心とした業務への還元、という二つの視点から総括し、むすびとしたい。

第一の資料利用普及・促進という点においては、展示形式での画像コンテンツとしての活用と、研究成果データのウェブサイト公開による検索補助ツールとしての利用を検討した。定点観測写真は、所蔵資料のうちでも比較的利用頻度が高く、利用条件等の点からも扱いやすい資料群である。そこで本稿では、デジタルアーカイブ・コンテンツ化による積極活用研究の事例として、これらの検討を位置づけ、次のような成果を得たと考えている。

一つは、当該資料のコンテンツとしての魅力を活かし、公文書館と利用者をつなぐ糸口として機能させるという方法である。定点観測写真のような、見る者の誰にでも親しみやすい地域写真コンテンツは、公文書館になじみのうすい利用者でも楽しむことができる。これらを効果的に提示するデジタルアーカイブの提供は、利用者の裾野をひろげ、公文書館資料の活用を促進する上で、今後もますます重要性を高めていくと考えられる。その意味でも、この資料群を活用して積極的にウェブサイト上へ展開し、方法論的検討を深めていくことが重要であると考えている。

これと関連して述べるならば、今回の成果である継承系統による地域写真データ体系は、定点観測写真以外へも適用が可能である。そこで、所蔵写真資料全体を対象として、地域別に整理し、このデータ体系にリンクさせる。こうすることで、今回のデータ体系を、写真資料全体の検索キーとして機能させる発展的活用が考えられる。さらには、写真以外のすべての地域資料（絵はがき、地図などの画像資料のほか、郷土誌類などの文書資料をふくむ）までリンク対象を拡大すれば、資料種別横断的な地域検索ツールとして機能させることも可能であろう。これは同時に、地域をキーとして多様な資料へアクセスする、新しい利用方法の提案へとつながる。こうした地域・地区を意識した情報・サービス提供の姿勢は、基礎自治体の公文書館にとって重要な視点と考えている。

第二の公文書館業務、とくに資料（情報）提供・レファ

レンスへの活用については、次の点で成果があった。

今回の分析により、所蔵資料のうちで、現在最も利用頻度の高い写真資料群について、そのコンテクスト（作成経緯・来歴情報）を明らかにするとともに、構造把握によって各年次の特徴が理解できた。とくに、市内全域におよぶ地域写真の系統的整理・分析では、各地域における街づくりの進展が、資料群および定点観測事業の変遷上にも具体的に反映されていることが判明した。

このような資料群に対する基礎的知識の深化は、公文書館における適切な資料・情報提供をする上で不可欠のものである。すなわち基礎研究の成果によって、さまざまな出所から構成される、所蔵資料（各資料群）の構成・特徴の把握が可能となり、多様な関心を持つ利用者に対して、それらを組み合わせた、適切なレファレンスを行うことができるのである。さらに、展示や刊行物、講演や体験等のイベントを通じた利用促進など、館の事業全体まで活用範囲を広げ、活動の資的向上に還元していくことが重要であろう。

また同時に、こうした活動を可能にするためには、職員全体への成果共有が不可欠である。知識の共有化にむけてはその方法論の検討が必要であるが、今回の成果については、ひとまず定点観測撮影の事業概要・地域別特徴などの説明と、継承系統リストからなるガイドを作成し、情報提供・共有化をはかりたい。また地域の変遷・特徴については、市内外の利用者の関心も高い分野であるので、閲覧者が利用するツールにまで、加工・編集する方法論的研究が今後の課題となろう(27)。

本稿では、資料群の構造分析と、その成果を公文書館活動に活用する方法論について、定点観測写真資料を例として検討を行った。今後は、本稿で提起した課題について実現への検討を重ねるとともに、分析の対象を広げつつ、所蔵資料の有効活用へ寄与する基礎研究の蓄積を進めていきたい。

（札幌市総務局行政部文化資料室郷土史相談員）

【附記】

本稿は、平成二十四年七月二十四日に開催された総務省・筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター主催「ワークショップ～Digital Archive Networkの構築に向けて～」（於・札幌市中央図書館）における、ショートトーク「札幌市定点観測写真のデジタルアーカイブ化」の報告内容を基礎に、資料群の構造分析を加え、活用方法を検討したものである。なお、定点観測写真資料に関する分析は、蔵満和泉（文化資料室郷土史相談員）との共同研究である。

【注】

（1）行政利用では、市が主催する「北一条さっぽろ歴史写真館」での写真展示（観光文化局市民文化課）や、大通公園一〇〇周年記念事業（環境局みどりの推進課）などへの協力が挙げられる。また刊行物としては、『札幌市の昭和』（いき出版、二〇一二年）に対し、掲載写真の半数近くを文化資料室で提供している。

（2）文化資料室の郷土史相談室利用件数は、平成二十年度は年間四六四件であったものが、二十三年度には一、三五九件となり、約三倍の増加を示している。この増加分の利用者の傾向として、写真資料の利用を中心とした層が高い比率を示している。

（3）昭和五十二年の初回撮影時は、教育委員会社会教育部文化課が主管し、平成二年・十二年は市民局生活文化部市民文化課、二十一年は観光文化局へ機構変更となっている。

（4）「１９９０年定点観測撮影の地点設定について」（札幌市文化資料室内部資料）。

（5）「緊急雇用創出事業　定点観測撮影業務　仕様書」二〇〇九年度（同前）。

（6）「札幌市写真ライブラリー条例」（平成五年三月三十一日制定、条例第十四号）。

（7）厳密な意味で定点観測としての資料評価を行うならば、画像イメージとしての継承性、すなわちアングルや季節性の同一感をも問うべきであろう。しかし、資料総件数は一万一千件を超え、その検証には膨大な作業を要するため、今回はあえて画像イメージの検証は極力割愛し、メタデータ上での検討を行った。そのため、今回作成した継承系統については、画像イメージの観点から再検討を行うことが必要である（継承系統と画像イメージの乖離については、三で例示的に言及している）。

（8）これらのテーマ性に基づき撮影された写真は、被写体の行為内容が重要であるため、所在地（撮影地）情報が曖昧、もしくはあまり意味をなさないものもある。これらに対しては、今回用いた所在地を軸にした整理は不適切な場合も想定しうる。そのため、今後、こうした写真群については別途情報提示方法について検討が必要である。

（9）前掲、「１９９０年定点観測撮影の地点設定について」および「９０定点撮影仕様書」（札幌市文化資料室内部資料）。

（10）これ以降の回で、こうした区役所や、庁内他部局への協力依頼が出されたかは、資料が不足しているため判然としない。むしろ地点チェック業務なども含めて、写真ライブラリーが主導的役割を担っていた可能性がある。

（11）以下の考察について、直接典拠とした資料は、二〇〇九年段階の「定点観測撮影業務　仕様書」である。しかし、ここで示された基本方針は、ＡＨ・ＢＨの両写真資料に共通する特徴と

みなすことが可能である。かつ、〇九年撮影資料の対象は、二〇〇〇年と継承関係を有する比率が高く、同一の番号が付与される形式である。こうした状況から考え、二〇〇九年の仕様書における目的・業務の方針は、二〇〇〇年段階に設定されたものと同一であると推測した。

(12) 前掲、「緊急雇用創出事業　定点観測撮影業務　仕様書」。

(13) 清田区は、表1にあるように、積極的な地点数の拡大が行われたが、当初の地点数が極端に少ないため、継続回数でも一回分程度少ない値になったと考えられる。

(14) 地点数が集中する中心部（大通公園まちづくりセンター地域）は、本府・中央・大通の各地区に区分し、さらに大通西一～一三丁目（テレビ塔～札幌市資料館）の範囲を「大通公園」の区分とした。また、南区の藻岩山部分、手稲区の手稲山部分は、それぞれ独立の区分として設定した。

(15) 導入に際しては、地域人口を示す統計区が、今回用いた地域区分（まちづくりセンター所管地区）とは異なるので注意が必要である。この共通化も検討したい。なお、地域人口と都市開発の関係について分析している先行事例では、平工剛郎『戦後の北海道開発』（北海道出版企画センター、二〇一一年）がある。

(16) 厚別区以外についての分析は、後日整備する資料検索用ガイドとして公開したい。

(17) この際の地点設定では、各区役所に協力要請が出され「各区百地点」の目標値が掲げられた（前掲、「1990年定点観測撮影の地点設定について」）。

(18) 前掲、注2を参照。

(19) 二〇〇〇年以降は、大分類だけでなく、下位の階層分類も付与されているが、統一的ではないため活用しきれていない。

(20) まずはウェブ接続はせず、独立系のパソコン等を利用した端末展示から着手する。こうした方法は、名古屋市市政資料館など他自治体でも導入されている。また、パネル等での新旧写真比較展示はポピュラーな手法であり、最近では広島市公文書館「広島の復興をたどる写真展　町・人・てんてん」などで行われている。

(21) この展示については、藏満和泉「札幌市文化資料室における定点観測写真の普及活用について」（平成二十三年度国文学研究資料館アーカイブズ・カレッジレポート）を参照。なお、同レポートでは、定点観測写真の活用方法についても検討している。

(22) 理想的にはデジタル・サイネージのような大型表示装置が望ましいが、第一段階としては、独立系のパソコン端末でタッチパネル・ディスプレイを用いる方法を想定している。

(23) 検索対象となるデータは、タイトル及び所在地情報のほかに、「時計台」や「雪まつり」など、キーワード検索用の備考データを整備、付与する予定である。

(24) このような写真群については、今後、画像イメージを確認し

つつ、タイトルや継承情報の修正（組み替え、削除など）が必要である。そのため、今回提示した系統数の情報は、本稿執筆時の数値であり、今後の見直しによって増減する可能性が高い。

(25) 丘珠空港ビル内に設置された、札幌のまちや丘珠空港と丘珠地区に関する歴史展示スペース「札幌いま・むかし探検ひろば」（平成二十三年九月開設）である。この展示には、文化資料室からも多くの資料提供を行っている。

(26) Geographic Information System(s)の略。コンピュータ上に、人工衛星、現地踏査などから得られたデータをもとに、地図情報やさまざまな付加情報を作成・保存し、地理情報を参照できるように表示・検索機能をもったシステム。空間、時間の面から分析・編集することができ、科学的調査、土地、施設や道路などの地理情報の管理、都市計画などに利用されている。

(27) 地域資料として利用率の高い『札幌商工人名録』に関するレファレンス・ツール研究として、橋場ゆみ子「札幌市商工人名録に関するレファレンスツールの整備―札幌市公文書館の利用促進を目指して―」（本誌所収）がある。

写真１　札幌駅北口

1977年

1990年

鉄道高架化工事が開始

2000年

北口駅前広場が整備

2009年

ＪＲタワー

ステラプレイス

が開業

写真２　モエレ沼公園

1977年

1990年

植樹が開始

2000年

公園として整備

2009年

新施設が建設

（整備事業が進行中）

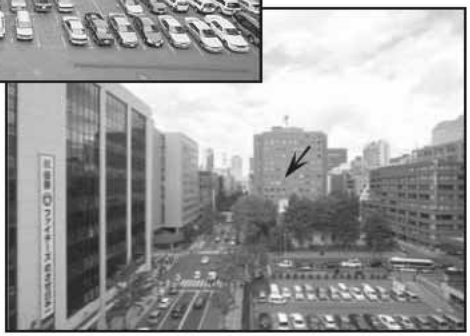
写真 3　歴史的写真

『札幌全景』（1917年刊）

2000年

どの写真にも
時計台(矢印)があり、
中心部の高層化の
激しさがわかる。

※NTT大通2丁目ビル
屋上から北方を撮影



2009年

写真４
新札幌（サンピアザ）周辺

1977年

1990年

2000年

2009年